

台北帝国大学と台湾学研究

歐 素瑛

はじめに

台湾の近代的大学は、日本統治期の 1928 年に創立された台北帝国大学（以下、台北帝大と省略する）を嚆矢とする。当大学は日本帝国の南方辺境に位置し、植民地という特殊性と相まって、台湾を中心とした華南・南洋研究を進めてきた。その中で、文政学部は台湾・華南及び南洋を専門に研究し、各講座は台湾を主な対象として研究した。例えば、土俗・人種学は言うまでもなく、心理学は民族心理学を重視し、言語学は華南・南洋の言語を教材としていた。倫理学は関心の重点を東洋全体に置き、政治学・経済学等の講座も東洋の資料を使用していた。理農学部は理学をもって農学を促進するとのコンセプトで農学、熱帯農学、農芸化学等の講座を開設し、台湾を中心地域として熱帯・亜熱帯の動植物研究を行っていた。1936 年の医学部成立後は、さらに熱帯医学の研究に全力を注いだ。これら学術研究の成果はそのほとんどが台湾総督府及び日本政府の政策決定の際には重要な参考資料となり、実際に台北帝大は日本の南進に対して政策補助機関という役割を果たす、植民地性と近代性を兼備する「植民地大学」「国策大学」となった。

このような性格を踏まえた上で、本論は台北帝大の台湾学研究を中心に、その創立史と特色を検討し、文政・理農及び医学部の台湾学研究とその成果に関する分析を通して、日本帝国の学術圏における台北帝大の役割とその重要性を明らかにしたい。

1 台北帝大の沿革及び特色

台湾における近代的高等教育は日本統治期から始まり、日本の台湾植民地統治の需要に応じて 1899 年に設立された台湾総督府医学校が台湾初めての高等教育機関となった¹。台湾総督府が高等商業学校や農林専門学校を設立したのは 1919 年「台湾教育令」が公布された後のことであり、1928 年に台北帝大が創立されたのである²。

実は、日本の台湾占領初期の頃から、すでに在台日本人が当地で大学を設立することを何度も要請していた。1899 年 2 月 3 日、帝国貴族院議員の阪谷芳郎は台湾協会会長桂太郎に上呈した意見書の中で、台湾文化の向上のため、また北白川宮能久親王の記念

¹ 呉文星「日拠時期台湾の高等教育」『中国歴史学会史学集刊』第 25 期、1993 年 9 月、143-157 頁。

² 台湾教育会『台湾教育沿革誌』台北：台湾教育会、1939 年、940-942 頁。

事業として、台湾に大学を設立する必要性を述べた³。しかし、当時の日本教育政策の下では植民地において高等教育機関を設立することが許されなかったため、この意見は結局採用されずに終わった。第一次世界大戦終了後、日本は高等教育を拡充するため、東京・京都・東北以外に、九州と北海道に帝大を開設した。1911年の九州帝大設立時、『台湾日日新報』は、ドイツ、イギリス、アメリカ等は皆新たに獲得した領土や植民地に大学を設立しており、その統治効果が著しいことを指摘した。そして、当時の台湾の各種教育施設はいまだレベルが低いため、植民地統治を成功に導くには高等教育機関を作る必要があると論じた⁴。1919年の北海道帝国大学の設立は台湾大学設立派に大きな励ましを与え、『台湾日日新報』の記者は、札幌農学校が数多くの人材を輩出し北海道の開拓に貢献したことを例に、将来台湾大学を設立すれば同じ効果が得られること、台湾は日本初の植民地、唯一の熱帯領土として、大学を設立する必要性が高いことを論じた⁵。しかし、両記事とも大学設立の理由を同化主義に基づく観点からのみ述べたため、広く共感を得ることは出来なかった。

1919年1月、台湾総督府は「台湾教育令」を公布し、普通、実業、専門及び師範学校の教育制度⁶を確立した。これによって、台湾人の教育システムが完成した。当時の『台湾日日新報』は日本の教育制度と呼応した教育制度を実現させるため、「台湾大学設立論」というテーマの下で隈本繁吉、鈴木真吉、南新吾、中村啓次郎、高木友枝、谷野格、東郷実、木村匡、菅野善三郎、李延禧、稲垣長次郎、羽鳥精一、素木得一、堀内次雄、角源泉など多数の地元実業家、学術専門家、法学者、教育関係者にインタビューを行い、連続十数本の論説を掲載して台湾での大学設立を促した。その内容は、台湾に大学を設立することは時代の要求であり、日本・台湾青少年の教育のため、台湾の開発及び日本勢力を華南・南洋へ拡大するためのものであるというものであった。また同時に、台湾が保持する教育資源・設備を利用して、台・日両民族の親善を促し、台湾人の法学知識を強化して統治の便を図ることも出来るなど、大学設立の希望を熱く語った。1920年、「台湾大学期成同盟会」名義で以上の論説を『台湾大学設立論』としてまとめ、帝国貴族院、衆議院各大臣及び台湾総督府に送り、より積極的に大学設立の希望を訴えた⁷。

1922年、台湾総督府は新「台湾教育令」を公布し、中等以上の教育機関について、「内台共学」理念の下、日本人・台湾人間の差別待遇と隔離教育を解消した。同年、台北高等学校を創立し、まずは修業年数4年の尋常科を設立、1925年には高等科を設けた。高等科は文・理両科に分かれ、修業年数は3年であった。台北高等学校の卒業生は台北帝大あるいは日本国内の各帝国大学へ進学することが可能であった⁸が、卒業生の進学を促すために、同時期に台北において「医科、農科、文科大学」の設置計画を発表した。しかし、

³ 吳密察「従日本植民地教育学制看台北帝国大学的設立」『台湾近代史研究』台北：稻郷出版社、1990年、174頁。

⁴ 「植民の半面」『台湾日日新報』1911年1月12日、第2面。

⁵ 「日日小筆」『台湾日日新報』1918年4月2日、第3面。

⁶ 佐藤源治『台湾教育の進展』台北：台湾出版文化株式会社、1943年、65頁。

⁷ 久保田「台湾大学設立論」『台湾日日新報』1919年11月24、26、30日、第3面。久保島天麗編『台湾大学設立論』台北：台湾大学期成同盟会、1920年。

⁸ 台湾教育会『台湾教育沿革誌』、952-854頁。

日本国内では、台湾で大学を設立することは時期尚早であるという意見が見られた。大学設立は台湾統治の根本的な方針とは食い違っており、被統治者の自立意識の覚醒は封印し、統治上の問題を招きがちな法政教育を避け、医学部と農学部を中心とした実業大学を開設するだけでよいとの主張である⁹。

1924年9月、伊澤多喜男は台湾総督着任後、台北帝大創立の企画に没頭した。彼は友人の幣原坦に企画を任せ、1925、1926年に「帝国大学創設準備費」及び「大学新営費」を計上し、計画を具体化した。伊澤は実業大学では満足せず、人文学科を含め、台湾の文化を発展させることの出来る総合大学の設立を目標としていた。幾度かの議論の後、最終的には文科+法学科、理科+農科を新大学の基本的な構成にすることを決定した¹⁰。そして、台北帝大の学術的發展の上で重点を置く特色を、以下のようにまとめた。

台北大学ノ特色トシテ見ルヘキハ文政学部ニシテ他ノ大学ニ類例ナキモノ、南洋史学土俗人種学ヲ以テソノ最ナルモノトシ、心理学ノ如キモ、民族心理学ニ重キヲ置キ、言語学モ教材ヲ東洋南洋ニ取り、倫理学モ、西洋倫理ノミニ偏スル従来ノ型ヲ破リテ、特ニ東洋倫理ヲ配セリ。又他ノ大学ニ於テ支那哲学、又ハ支那文学ト称スルモノヲ尽ク東洋哲学、東洋文学ト改称シ、眼ヲ東洋一般ニ注クヲ期セリ。政治学、経済学、法学等ニ至リテモ亦同然ニシテ、教材ヲ西洋ニ取ルヨリモ寧ロ東洋ノ事例ニ着目セシメ、又東洋倫理学ハ政学科ノ一学科ヲナセリ。理農学部ニ至リテハ、総テ台湾ヲ中心トスル、熱帯亜熱帯ノ対象ニヨリテ講究ヲ進メ、内容カ他ノ大学ト差異アリハ言ヲ俟タス¹¹。

大学の名称に関して、台湾総督府が最初に決めた仮称は「台湾帝国大学」であった。中央の法制局の審査で、この学名は「台湾帝国」の大学との誤解を招きやすいという理由で否定され、最終的には日本本土の帝国大学の名称との一体性を保つため、学校所在都市の名称によって命名された。ここには、民族意識の高まりを避けようとする姿勢が窺える。1928年、上山満之進総督の時期、勅令第31号「台北帝国大学官制」が公布され、大学の制度、人事、経費はすべて日本内閣及び台湾総督府の管理によるものとし、植民地色の濃い大学の輪郭が作られた。同年3月17日、さらに勅令第48号をもって「台北帝国大学組織規程」や他の関連法令を公布し、台北の富田町台北高等農林専門学校内に台北帝大を創立することとした。文学博士幣原坦を初代学長に任命し、文政、理農学部長に藤田豊八¹²と大島金太郎を置いた。同年3月30日に第1回入学宣誓式を催し、5月5日から授業が始まった¹³。

⁹ 馬越徹「台北時代の幣原坦—台北帝国大学の創設と展開」『近代日本のアジア教育認識—その形成と展開』（文部省科学研究費補助金研究成果報告書、1994-1995年）、98-99頁。

¹⁰ 松本巍著、蒯通林訳『台北帝国大学沿革史』台北：訳者、1960年、1-4頁。

¹¹ 伊澤多喜男伝記編纂委員会編『伊澤多喜男』羽田書店、1951年、158頁。

¹² 藤田豊八は東西交流史を専門とし、多くの学部を創立した。1929年東京出張中に他界し、その後任を南洋史学講座の村上直次郎教授が務めた。

¹³ 松本巍著、蒯通林訳『台北帝国大学沿革史』、4頁。台北帝国大学予科創立五十周年記念誌編集委員会『芝蘭：台北帝国大学予科創立五十周年記念誌』1994年、241-243頁。

台北帝大は日本帝国の南方辺境に位置する植民地大学として、南進政策の推進に合わせた特殊な目標と位置づけを持っていた。初代学長幣原坦は大学の準備段階で、『台湾時報』に「台湾の学術的価値」という一文を発表し、「じつに南方文明の究査は、時代の要求ともいふべきものである。而してこの究査に最も便宜なところとして、こゝに台湾が横はつてゐるのである。台湾は、日本の領土中、一步南洋に踏出してゐる唯一の足場である。さうして人文科学の上にも、自然科学の上にも莫大な価値を示してゐる」と指摘した¹⁴。このように、日本当局は台湾の特殊な地理的条件を利用して、台湾を中心とする華南・南洋研究を進めようとし、台北帝大はこの構想を実現する国策大学の役割を演じさせられた。したがって、各学科とも台湾を主な研究対象とし、例えば文政学部では、他の大学には見られない南洋史学専攻とともに、土俗・人種学講座も設け、台湾を背景とした特殊な意味を物語っている。心理学では民族心理学を重視し、言語学は東洋・南洋各地の言語を用いた教材を多く使用した。倫理学は、従来の西洋倫理学のみに偏る形を破り、東洋倫理学を広く応用する講座となった。理農学部では台湾の熱帯・亜熱帯農業の研究を目的に動植物資料を収集したが¹⁵、その内容が著しく特徴的であることは言うまでもない。以上をまとめると、文政・理農学部が行った東洋・南洋及び熱帯に関する諸研究は、他の先発大学には見られない個性を持っていた。

創立当初、大学には文政・理農両学部が設置され、また勅令第33号によって講座編制が定められた。具体的には、文政学部には哲学・史学・文学及び政学の4学科、理農学部には生物学・化学・農学・農芸化学の4学科を置き、修業期間は3年から6年であった。当初は35の講座が作られ、のちに少しずつ増加していった¹⁶。講座制は欧米諸大学を模倣したもので、教育と研究を兼業出来るという機能を持つ。講座を大学の基本的な組織とし、各講座は1名の専任教授を主任とし、その下に助教授、助手、嘱託講師、事務員等がいた。各講座の経費予算等は独立しているため、講座教授の権力は大きく、全学が関連する事務以外は、教授によって構成される教授評議会がすべて自主的に決めることが出来た¹⁷。同時に、各講座には経費以外に研究室と図書設備が備えられ、学生が入学後、選択した専攻で指導を受け、卒業論文を作成する場所となった¹⁸。このように、各講座は完全かつ独立した研究組織として存在しており、講座教授とその研究領域を中心とした学術研究成果を追求する環境は、この大学の最も重要な特徴であった。

1936年1月、大学当局は、台湾の気候と風土が日本内地と異なるために開発に当たっては医療衛生面の問題が多々発生することを予想し、知識・経験の豊富な医学者を招いて熱帯医学研究に従事させることとし、医療設備が充実していた台北医学専門学校と台北医院を基盤に医学部を創設した。修業期間を4年から8年と定め、東京帝大名誉教授・法医学博士三田定則を医学部長とし、さらに日本内地より医学分野の人材を招聘し、優秀な教師陣をもって、台北帝大医学部が日本一の医学部となることを期待した。「台

¹⁴ 幣原坦「台湾の学術的価値」『台湾時報』1926年12月、25-26頁。

¹⁵ 松本巍著、蒯通林訳『台北帝国大学沿革史』、8-9頁。

¹⁶ 松本巍著、蒯通林訳『台北帝国大学沿革史』、6-7頁。

¹⁷ 国立台湾大学編『接收台北帝国大学報告書』1945年、23頁。

¹⁸ 邱景墩・陳昭如「戦前日本の帝国大学制度与台北帝国大学」『台北帝国大学研究通訊』創刊号、1996年4月、4頁。

北帝国大学医学部の教授陣が日本一であれば、医学生も当然日本一であるべき」と謳っているように、1936年に初めて学生を募集したところ、応募人数は120名に達し、うち40名が合格、合格率は39.2%であった。同年の東京帝大医学部の合格率は55.6%であったから、一時期、台北帝大医学部は東京帝大医学部より入学が難しかったことになる¹⁹。1938年3月、医学部付属病院が設置された。1939年4月、台湾総督府は中央研究所衛生部を熱帯医学研究所と改め、台北帝大の付属機関として植民地の特殊風土・気候の研究を基盤に据えた。

1942年になると、太平洋戦争の勃発と南進政策の推進によって、大学組織は大きく改編された。理農学部は理学部と農学部に分かれ、また翌年には工業化促進のため工学部を増設した²⁰。具体的には、理学部は化学・動物学・植物学・地質学の4科、農学部は農学・農業経済学・農業土木学・農芸化学及び獣医学の5科、工学部は機械工学・電気工学・応用化学及び土木工学の4科となり、全部で114の講座に組み直された。その後、1943年3月には学内の人材・物資を統合するため、南方人文研究所、南方資源科学研究所を設置し、台湾を中心とする華南及び南洋の資源に関する研究・開発に力を入れ、両研究所は日本帝国における南方研究の橋頭堡となった²¹。台湾総督府の資金援助の下で、当学の学術研究は日本政府の政策に歩調を合わせ、台湾総督府と日本政府の政策に重要な参考となる研究成果を続出した。台北帝国大学は、植民地性と近代性をあわせ持つ「植民地大学」「国策大学」となっていた²²。

1944年の時点では、台北帝国大学は文政・理・農・医・工の5つの学部より構成され、文政学部内に25講座、理学部に13講座、農学部には22講座、医学部に24講座、工学部に30講座があり、計5学部、17学科、114講座を持っていた²³。その他の付属機関としては、図書館、農場、演習林、病院、熱帯医学研究所等があった。

当大学の卒業生数は僅かであり、さらに台湾籍の学生数と日本籍の学生数の差が激しかった。1944年を見てみると、全学357名の学生中、日本人が268名、台湾人が85名、その他4名で、台・日学生の比率は1:4であった。台湾籍学生の多い医学部在籍者を除けば、台・日学生の比率は1:8にもなり、あくまでも台湾人学生のための教育機関ではなかったことがわかる²⁴。教員と学生の比率においては教員が多く学生が少ないという特徴があり、教員の数は学生より平均60%も多く、学術研究を中心とする傾向が見られた²⁵。

¹⁹ 杜聡明『回憶録』台北：杜聡明博士奨学基金会、1982年再版、92頁。莊永明『台湾医療史—以台大医院為主軸』台北：遠流出版社、1998年、299頁。

²⁰ 『公文類聚』第65編、昭和16年、巻113（国立公文書館請求番号：本館-2A-012-00・類2522）。

²¹ 「南方人文研究所：参考書綴」『台湾大学校史档案』台湾大学蔵、文書番号：254。「南方人文研究所：統計報告」『台湾大学校史档案』台湾大学蔵、文書番号：258。吳文星「日据時期台湾の高等教育」『中国歴史学会史学集刊』第25期、1993年9月、153頁。

²² 吳密察「從日本殖民地教育學制發展看台北帝国大学の設立」『台湾近代史研究』、149-175頁。

²³ 松本巍著、蒯通林訳『台北帝国大学沿革史』、10頁。

²⁴ 黃得時「從台北帝国大学設立到国立台湾大学現況」『台湾文獻』第26巻第4期、第27巻第1期合刊、235-236頁。吳文星「日据時期台湾の高等教育」『中国歴史学会史学集刊』第25期、1993年9月、154頁。

²⁵ 吳文星・陳舜芬等「台湾高等教育の發展」『亞洲大学の發展—從依賴到自主』台北：師大書苑、1990年、345頁。

2 文政学部台湾学研究

1928年3月に公布された「台北帝国大学文政学部規定」では、文政学部は文学科・史学科・哲学科及び政学科によって構成されていた。なかでも南洋史学、土俗学・人種学、言語学及び心理学講座が台湾学研究と最も密接な関係にあり、台湾と華南・南洋地域の人文研究に力を注いでいた。本節では、各講座を具体的に分析していく。

(1)南洋史学講座

戦前日本の7つの帝国大学は、すべて国史学・東洋史学・西洋史学の3つの専攻講座を設置しており、台北帝国大学のみが南洋史学講座を開設し、これが大きな特徴であったが、史学科の学生においても南洋史を専攻する者が一番多かった。南洋史の講座教授は東京帝大文学博士村上直次郎(1868-1966)であった。1896年、村上は、まだ帝国大学文科大学の大学院生であった時、拓殖務省嘱託として、台湾で約半年間調査研究を行った。台湾へ渡る前、村上はずばり熊本へ赴き、柏原平八郎の所蔵する古文書『異国高砂』を調査した。次に長崎・平戸・大村へ移動して、鄭成功や浜田弥兵衛の事跡や台日間の往来に関する史料を収集し、その他にも希少価値のあるキリスト教古文書を手に入っていた。11月初頭に台湾へ到着した後は、西部各地を巡回する調査の仕事に従事した。翌年1月初め頃、旧台南府城付近の新港社で、オランダ文字で記された土地契約書(「蕃仔契」)を発見した²⁶。村上は、もし漢蕃対訳の「蕃仔契」があれば、それをもとにした解説は、言語学への貢献と台湾における人種問題にヒントを与えるかもしれないと判断した。そこで、彼は発見した「蕃仔契」の図版を台湾総督府民政局学務部の嘱託で言語学専門家の小川尚義に渡し、研究を勧めた。村上はその「蕃語ローマ字」で書かれた土地契約書を「新港文書」(Sinkan Manuscripts)と命名し、これに関する初期の研究を『史学雑誌』に発表した²⁷。1922年4月、村上は台湾総督府史料編纂委員会に雇われ、主にオランダ占領期における台湾の事跡史料の収集と調査を任された。さっそく年末に再び台湾へ赴いて中南部での視察と資料蒐集を行い、翌年1月9日に東京へ戻った²⁸。

1928年4月、村上直次郎は台北帝大教授となり、総督府の「在外研究員」の身分でオランダ、イギリス、スペイン、ポルトガル及びオランダ領であったジャワへ視察旅行に赴いた。村上が得意としたのは、オランダ・スペインの資料を用いた台湾史、南洋史及び日本-南洋関係史とカトリック教会史研究である。1930年、史学科は西洋史学、地理学講座を増設し、村上は講座教授を兼任、1935年の台北帝大辞職まで在任し、その後は助教授菅原憲に引き継がれた²⁹。1929年8月、村上には藤田文政学部長後の空白を補うため、文政学部長を兼任した。1933年には『新港文書』を出版、書中には109件の文書を

²⁶ 佐藤直助「村上直次郎先生を追憶して」『上智史学』13、1968年10月、3-6頁。

²⁷ 村上直次郎「台湾新港文書」『史学雑誌』8:7、1897年7月、674-683頁。

²⁸ 「村上直次郎「府史料編纂ニ関スル事務ヲ嘱託ス」」『台湾総督府公文類纂』第3752冊38号文書、1923年7月28日。「人事消息」『台湾時報』第53号、1924年2月、163頁。

²⁹ 「彙報」『史学研究年報』第一輯、東京：巖松堂書店、1934年、451-454頁。「彙報」『史学研究年報』第二輯、東京：巖松堂書店、1935年、421頁。「彙報」『史学研究年報』第三輯、東京：巖松堂書店、1936年、374頁。

収録、そのうち 87 件は新港社のもので、その他に卓猴社 3 件、麻豆社 16 件、大武壠社 1 件、下淡水社 1 件、茄藤社 1 件が含まれている。新港文書はオランダ文字で表記されたシラヤ族（Siraya、平埔族の一支族）の残した土地の賃貸・売買・貸借に関する契約文書であり、平埔族の文化と 17 世紀台湾史の研究において非常に貴重な資料といえる。

1935 年に村上が離任した後は、岩生成一（1900-1988）が講座教授を引き継いだ。岩生は 1925 年に東京帝大国史学科を卒業し、同大学の校史編纂係を経て、台北帝大教授に転任した。岩生の専門は南洋日本人町と日本人の活動に関する研究である。オランダ語・スペイン語で記された東南アジアの文献資料を対象とした 17 世紀日本人の南洋移民活動の研究を得意とし、「バタビヤ移住日本人の活動」「洗礼簿を通じて見たるバタビヤの日本人」「モルツカ諸島移住日本人の活動」「媽港ゼス会コレジオに於ける日本人」等の論文を発表した。1941 年 4 月、著書『南洋日本人町の研究』で日本帝国学士院賞を受賞。1946 年末に日本へ帰還する際、自らの研究草稿や海外で蒐集した関連史料を日本へ持ち帰って研究を続行し、『続南洋日本町の研究』を完成させた³⁰。

1936 年の岩生の講座教授昇任後は、新たに箭内健次が講師に雇われた。箭内は東京帝大国史学科の卒業で、スペイン語文献を用いたフィリピン史の関連研究を専門とし、「基督教史上の一発見」「初期英国東印度会社の対日本通商計画」「シーボルト 83 作製の地図について」「シーボルトに提供せし門人洽文の研究」「シーボルト原稿解説」などの論文を発表した³¹。

村上、岩生、箭内の指導の下で、南洋史学講座は合わせて 13 名の卒業生を世に送ったが、その内 4 名の研究テーマが 17 世紀の台湾史関連であり、その他は南支・南洋史の研究を行っていた³²。表 1 は暦年卒業生の修業期間及び卒業論文の題目である。

表 1 南洋史学講座卒業生の修業期間及び卒業論文の題目

名 前	修業期間	卒業論文
張樑標	1930-1933	第十六、七世紀に於ける南支と南洋の歴史的関係
淵協英雄	1930-1933	佔領初期にイスパニヤ（西班牙）の比島統治
山村光敏	1930-1933	十七世紀に於ける台湾經由の南洋貿易
郷原正雄	1930-1934	十六、七世紀に於ける呂宋島の日本人
速水家彦	1931-1935	鄭成功の台湾攻略と其後の対和蘭人交渉
中村孝志	1932-1935	台湾に於ける西、蘭両国人の教化事業
齋藤悌亮	1933-1937	鄭成功の台湾攻略
小名子正義	1935-1938	比律賓に於ける基督教の伝道事業に就いて
江本伝	1937-1940	十六、七世紀を中心としたる比律賓に就いて
当摩義村	1938-1941	比律賓革命史

³⁰ 岩生成一『続南洋日本町の研究』東京：岩波書店、1987 年、476-486 頁。

³¹ 「彙報：国史大学院例会」『史学雑誌』47：8、1936 年 8 月、1032-1033 頁。「箭内健次（任台北帝国大助教授；七等十二級；文政学部勤務；職務俸三百六十円）」『台湾総督府公文類纂』第 10093 冊 182 号文書、1938 年 5 月 27 日。

³² 陳偉智「文政学部一史学科簡介」『台北帝国大学研究通訊』創刊号、台北：南天書局、1996 年、85-89 頁。

(2)土俗・人種学講座

土俗・人種学講座は史学科の講座の一つである。史学科の学生は国史学、東洋史学、南洋史学のうち一つを選んで専攻するが、土俗・人種学の授業は必修科目であり、史学研究の補助的学問とされていた。講座教授はハーバード大学哲学博士の移川子之蔵(1884-1947)であった。1925年に台北帝大での留任を得た後、早速1926年には自ら岩手県遠野市へ赴いて伊能嘉矩の遺族を訪問し、伊能の残した手稿・蔵書及び台湾原住民の器具などの譲渡について交渉した。その後ヨーロッパへ調査研究に赴き、大量の人類学・考古学書籍を購入したのち、1928年に土俗・人種学講座へ帰任した。土俗・人種学講座は台北帝国大学が創立当初に設けた講座であった³³。

土俗・人種学講座は当時アメリカで流行していた歴史人類学の影響を強く受けており、標本資料の蒐集を重視し、教育よりも研究を中心とするスタンスを取っていた。豊富な財的・物的支援の下で華南・南洋の民族学、考古学及び体質人類学研究に用いる標本を次々に蒐集していった。

まず標本蒐集では、伊能嘉矩の遺族が寄贈した関連品300点の他、台湾原住民族の文化的特色を表す物が中心であった。例えば、平埔族の織物や刺繍品、日月潭水社のゴンドラ、アミ族の蒸し壺・服飾、タイヤル族の織機・敵の頭と顔用の刺青道具、ツォウ族の鹿の皮でできた衣服と帽子、ブヌン族の籠目文様陶器、パイワン族の木彫り・織物と刺繍品・瑠璃玉・陶器、及びヤミ族のゴンドラ・魚皮製の鎧・銀飾・陶器・点火道具などである。この他にも華南・南洋地域の民族学・考古学及び体質人類学的な標本が多い。1945年時点の所蔵標本は3435種にのぼり³⁴、数量的にも学術的にも重要な意味を持っていた。

考古学の研究は、1930年に屏東墾丁で石棺遺跡を発見したことから始まった³⁵。その後も台湾西部の平原で多くの先史時代の遺跡が発掘され、例えば台南台地北側の蔦松貝塚、高雄港南岸の佛港遺跡、高雄県左営桃仔園遺跡、鳳山丘陵西縁の橋二基、東縁の潭の源流、天岩洞、澎湖島の良文港遺跡、大肚丘陵西側の大肚・清水等遺跡、大肚溪谷北岸の営埔遺跡、及び新竹県竹南区の後龍底貝塚、中壢区海岸の草漯遺跡、台北景尾対岸尖山西麓遺跡、基隆社寮島の石棺遺跡などが挙げられる³⁶。1944年には巨石文化遺跡で有名な台東卑南社付近での発掘作業も行われた³⁷。このような発掘はすべて、前代未聞の新資料を手に入れることによって、輝かしい成果を得た。

標本蒐集や考古学的な発掘以外で、土俗・人種学講座の最も重要な業績は、1935年に『台湾高砂族系統所属の研究』を出版し、1936年度の日本帝国学士院賞を獲得したことと言えよう。本書は元総督の上山満之進が退職に際して寄付した基金を使用して制作されたもので、台湾原住民研究をテーマとして、1930年から1932年の間に移川と助手の宮

³³ 馬淵東一「移川先生の追憶」『馬淵東一著作集』第3巻、東京：社会思想社、1974年、467-483頁。

³⁴ 台北帝国大学文政学部史学科編『台北帝国大学開学式記念展覽目録』1936年、58-71頁。芮逸夫「本系標本搜蔵簡史」『国立台湾大学考古人類学刊』第一期、1953年5月、16-19頁。

³⁵ 移川子之蔵『墾丁寮石器時代遺跡』台北：台湾総督府内務局、1936年。

³⁶ 金関丈夫・国分直一「台湾考古学研究簡史」『台湾考古文化』第6巻第1期、1950年1月、9-15頁。金関丈夫・国分直一「台湾考古学研究簡史」『台湾考古誌』東京：法政大学出版局、1979年、41-45頁。

³⁷ 金関丈夫・国分直一「台湾東海岸卑南遺跡発掘報告」『台湾考古誌』、130-157頁。

本延人及び史学科卒業生馬淵東一等が中国・オランダの文献や口承資料、台湾全島各地から採集した原住民族各社の系譜によって、各部族の構成・社会形態と移動状況等を調査し、まとめたものである。中には地図、一覧表及び写真も付されており、豊富且つ詳細な内容を提示している³⁸。調査終了後、台湾総督府が従来使用していたタイヤル、サイシャット、ブヌン、ツォウ、パイワン、アミ、ヤミの7民族の区分法は、タイヤル、ブヌン、サイシャット、ツォウ、パイワン、ルカイ、プユマ、アミ、ヤミの9民族に修正された。また、各民族の系統・言語・習俗等の調査研究を行い、台湾原住民族群の分類に関する初期の研究のなかでも最も重要なものとなった³⁹。その後、原住民族の固有言語と音楽を保存するため、また音声学、音楽理論の研究資料として使用するため、土俗・人種学講座は言語学研究室と協力して関連資料を収集したが、その中には宜蘭熟蕃の古典語・歌謡や新竹州サイシャット族の歌謡と笛の演奏曲等があった⁴⁰。

この他に移川は、講座の運営が徐々に軌道に乗りはじめた頃、1931年に自ら南方土俗学会を設立し、雑誌『南方土俗』（1940年『南方民族』に改題）を創刊した。台北帝大文政学部教授小川尚義、浅井恵倫、桑田六郎、力丸慈円、理農学部教授山根岸信、早坂一郎、医学部教授金関丈夫、森於菟、さらに台湾総督府の嘱託職員等考古人類学に関心を持つ学者や専門家と共に、月に一回討論会を開催して学術交流と宣伝活動を行い、当時、史学科のなかでも最も活発な学会となった⁴¹。1936年6月、台湾史資料の不足と史跡の状態の悪化などの問題を解決するため、台北帝大は史学科内に「台湾史料調査室」を設立し、国史学、東洋史学、西洋史学、南洋史学及び土俗・人種学講座を含む教員・学生17名で台湾の史跡の整備と史料の蒐集に協力しあうこととなった。その中で、土俗・人種学講座はフィールドワークの重点を台湾全体の民族群に拡大し、台湾総督府の皇民化政策に歩調を合わせ、台湾の寺院信仰問題に関する調査を始めた。その範囲は台北、台中、新竹三州の廟宇、史跡に及び、合計すると拓本120件、撮影史料600余枚を集めた。1937年4月、移川はパリで開催された国際人類学民族学会議に参加し、その帰路にオランダのハーグ国立文書館を訪問した際、17世紀オランダ占領期の台湾関連資料約2万5千点を撮影した⁴²。この年の7月中旬、日中戦争の勃発により経費が削除され、やむを得ず調査中止となったが、この期間における史跡調査は23回も行われ⁴³、大きな成果を挙げたことは間違いない。

³⁸ 台北帝国大学土俗人種学研究室編『台湾高砂族系統所属の研究』東京：凱風社、1988年復刻。「小川、移川両教授の受賞」『南方土俗』第4巻第2号、1936年、45-47頁。

³⁹ 馬淵東一「高砂族に関する社会人類学」『馬淵東一著作集』第1巻、東京：社会思想社、1974年、466-483頁。宮本延人口述、宋文薫・連照美編訳『我的台湾紀行』台北：南天、1998年、85-167頁。

⁴⁰ 「彙報」『台北帝国大学文政学部史学科研究年報』第4輯、台北：東方文化書局、1975年復刊、581頁。

⁴¹ 南方土俗学会編『南方土俗』台北：東方文化書局、1972年復刊。宮本延人・馬淵東一「『南方土俗』景印本刊行に寄せて」『馬淵東一著作集』第3巻、549-553頁。陳偉智「文政学部一史学科簡介」『台北帝国大学研究通訊』創刊号、94-97頁。

⁴² 移川子之蔵「荷蘭ハーグ国立文書館所蔵台湾関係文書目録」『台北帝国大学文政学部史学科研究年報』第5輯、1938年12月。

⁴³ 「台湾資料調査室の設置」「台湾資料調査室報告第一」『南方土俗』第4巻第2号、51-57頁。「台湾資料調査室報告第二」『南方土俗』第4巻第3号、1937年5月、51-55頁。「台湾資料調査室報告第三」『南方土俗』第4巻第4号、1938年6月、32-34頁。

(3)言語学講座

言語学講座は文学科の一講座であり、その性格は土俗・人種学講座と類似し、独立した専攻科目ではないが、必修科目とされたため、文学科の学生は全員この科目の授業を受けることになっていた。講座教授は小川尚義（1869-1947）で、彼は東京帝大文科大学博言学科を卒業した後に来台し、総督府民政局学務部嘱託職員、国語学校教授、学務部編修課長、高等商業学校校長などの職を歴任した⁴⁴。1928年3月に台北帝大講師に転任し、1930年3月台北帝大が言語学講座を増設したことによって、講座教授へと昇任した。小川は言語の天才であり、台湾に赴任してから数年の間に閩南語に熟達し、1907年に『日台大辞典』を完成した。その後は関連資料の収集に止まらず、1931、1932年に再度『台日大辞典』上・下巻を出版、さらに1938年には修正版『新訂日台大辞典』を出し⁴⁵、これは閩南語研究における非常に貴重な資料となった。

1935年、小川は大阪外国語学校の浅井恵倫と協力して『原語による台湾高砂族伝説集』を出した。書中、移川らが『台湾高砂族系統所属の研究』で区分した9族以外に、タイヤル族からセデック族（Seedeq）、ツォウ族からサアロア族（Saaroa）とカナカナブ族（KanaKanabu）を分類し、計12種類の原住民言語伝説263編を収録し、278個の基準音を羅列して各民族言語の比較表を制作した。1936年、この本は天皇恩賜賞を受賞し、「高砂族言語研究史上の一大ピラミッド」と称された。

1936年、小川尚義は退官し、浅井恵倫（1895-1969）が後任として台北帝大言語学講座助教授となり、1937年に講座教授へと昇任した。浅井は東京帝大文学士であり、専門は言語学であった。彼は鳥居龍蔵の「紅頭嶼學術調査報告」に啓発され、1923、1928、1931年の3回に亘って蘭嶼を訪れた。浅井はそこでヤミ族言語の調査を行い、ヤミ族の言語がインドネシアのバタム島の言語と近い関係にあることを発見した。言語の採集と比較を経たこの研究は、1936年に“A Study of the Yami Language: An Indonesian Language Spoken on Botel Tobago Island”としてまとめられ、浅井はこの論文によってオランダ・ライデン大学で文学博士号を取得した。この他、浅井は霧社のタイヤル族セデック部落の言語に興味を持ち、1927年に現地調査を行い、花岡一郎（1908-1930）に翻訳をさせながら言語採集の協力を得た。台湾で教鞭をとり始めると、浅井は積極的に平埔族諸言語のフィールドワークに没頭した。1939年に『台北帝国大学文政学部紀要』第4巻第1号に論文“Gravius’s Formulary of Christianity in the Siraya Language of Formosa”を発表し、欧米のシラヤ族言語の研究概況を紹介した⁴⁶。

言語学的な採集・研究以外にも、浅井は台湾滞在中に移川子之蔵、宮本延人らと一緒に民族学・考古学の発掘研究にも従事し、「埔里大馬璘石棺層試掘報告」「高雄州墾丁寮土器」などの論文を発表した。注目すべきは、浅井はフィールドワークにおいて台湾原住民の人物・服飾・彫刻・祭祀・労働状況及び部落・建築物などに関する写真を多数撮影

⁴⁴ 「小川尚義（任台北帝大教授；俸給；勤務）」『台湾総督府公文類纂』第10059冊73号文書。

⁴⁵ 小川尚義『台日大辞典』上・下冊、洪惟仁主編『閩南語經典辭書彙編』第七・八冊、台北：武陵出版社、1993年。

⁴⁶ 「浅井恵倫（任台北帝国大学教授；叙高等官三等）」『台湾総督府公文類纂』第10090冊121号文書。土田滋「人と学問 浅井恵倫」『社会人類学年報』Vol.10、1984年、1-28頁。

し⁴⁷、これらが貴重な原住民映像資料として残されていることである。

(4)心理学講座

心理学講座は哲学科の講座であり、東京帝大卒業の飯沼龍遠、力丸慈円、藤澤蒨が台湾に渡って創設した。この講座は土俗・人種学と同じ建物の中にあり、実験室、防音室、図書室、教室、研究室等の研究設備を有し、民族心理学を中心に、特に台湾高砂族の知力、形状知覚、色彩の好み、行為の特徴及び懲罰制度等について研究していた⁴⁸。

飯沼らは特に、台湾原住民の形態に対する記憶力と各民族の特徴の研究を通して、以下のような結果を得た。パイワン族は百歩蛇の模様の影響で特に三角形に敏感であり、ブヌン族は祭典中に狩りの捕獲物を均等に分配する習慣を持っているため、対称性のある図案に敏感である。パイワン族は豊富な彫刻作品を伝承しているが、彫刻師はすべて男性である。ブヌン族は特に工芸品を作らない。タイヤル族は好戦的で独断的であり、戦闘や出猟の際は剛毅で果敢、極めて遅く、女性も果敢である。ブヌン族の女性は労働に従事し、パイワン族の女性は踏襲的・保守的かつ装飾を重んじている⁴⁹。力丸慈円は台湾各民族の児童に知能検査を行った第一人者であり、その研究によれば、日本人児童の知力が最も優秀であり、台湾の漢民族児童はその次で、両者の区別はさほどつかないが、原住民の知力は両者と比べて比較的低く、特にタイヤル族とブヌン族の結果は各民族の中で一番低い⁵⁰。藤澤蒨が行った各民族児童の色彩の好みと色彩の記憶に関する調査からは、台湾の漢民族児童の色彩の好みの順位はアミ族・タイヤル族の間に大きな差異はなく、台湾在住の日本人児童も同じであること、青色が各民族の児童が共に一番好む色であることが分かった⁵¹。

以上に述べた4つの講座の他、文政学部哲学科ではさらに「社会学」の授業を設けており、岡田謙が講師を務めていた。岡田は1929年に東京帝大社会学科を卒業後、大学院に進学し、1年後の1930年4月より台北帝大の講師に就任した。彼は1936年に士林近辺の村落を調査した際、一前の主神を共同で奉祠する民衆会が周辺に集住していることを発見し、これに基づく「祭祀圏」の概念によって台湾の村落や家族団体を分類した。この研究の成果は、後に出版された『原始社会』にまとめられた⁵²。この他にも岡田は、社会人類学の立場から台湾原住民の社会研究を進め、『台北帝国大学文政学部哲学科研究年報』に「首獵の原理」「原始社会に於ける社会関係」「原始家族ブヌン族の家庭生活」「原始母系家族—パンツァハ族」等の論文を発表し、また1941年に上述の論文を集めて『未開社会に於ける家族』を出版した⁵³。

⁴⁷ 笠原政治編、楊南郡訳『台湾原住民映像浅井恵倫教授撮影集』台北：南天書局、1995年。

⁴⁸ 邱景墩「文政学部—哲学科簡介」『台北帝国大学研究通訊』創刊号、106-109、109-120頁。

⁴⁹ 飯沼龍遠他「高砂族の形態の記憶と種族的特色とに就て」『台北帝国大学文政学部哲学科研究年報』第一輯、台北：台北帝国大学、1934年、31-72頁。

⁵⁰ 力丸慈円「台湾に於ける各族児童知能検査」『台北帝国大学文政学部哲学科研究年報』第4輯、台北：台北帝国大学、1937年、421-472頁。

⁵¹ 藤澤蒨「色彩好悪と色彩記憶—一關係並に民族的現象に就て」『台北帝国大学文政学部哲学科研究年報』第3輯、台北：台北帝国大学、1936年、487-522頁。

⁵² 岡田謙『原始社会』東京：弘文堂、1939年。

⁵³ 岡田謙『未開社会に於ける家族』東京：弘文堂、1942年。

3 理農学部の台湾学研究

台湾の熱帯農業を開発するため、理農学部には生物学・化学・農学・農芸化学の4科目が設置されたが、「熱帯」という肩書を持つ農学講座が最も多い事実から、熱帯農学の特殊性と重要性が窺える。理農学部長大島金太郎はかつて学部理念について、「我国は台湾を領有して始めて熱帯農学の実験地を得たのであるが之が開発は着々効果を挙げてゐることは統計によつても明らかだ。……要するに生産学方面と農業経済方面の研究応用に勉めねばならぬ。……そこで熱帯の資源開発増殖の基礎的研究又は其の生産品の配給方法改善に関する基礎的研究に関し設立された我台北大学理農学部の如きは極めて重大な任務を帯び居る」⁵⁴と述べた。大島の理念は、台湾における熱帯農業の開発を強調し、豊富な熱帯資源を利用して農業経済と天然資源の化学研究を進めることだった。その結果として、台北帝大には他の帝国大学にはない製糖化学講座や農学・熱帯農学講座が設けられたのである。

(1) 製糖化学講座

台北帝大農芸化学科の下にある製糖化学講座は、日本全土の各大学の中でも独特であり、正式名称は「農産製造学・製糖化学」講座である。中沢亮治教授が農産製造学を担当し、浜口栄次郎教授が製糖化学を担当した。1939年に中沢が退官し、翌年に講座は製糖化学と醸造学の二つに分かれ、浜口が製糖化学講座の教授となり、馬場為二が醸造学教授に起用された。

砂糖黍は日本統治期台湾における最も重要な農産物の一つであった。製糖方法の数次の改良によって、1938年から1939年には年間生産量1,418,731トンの最高記録に達したが、これは浜口栄次郎がその研究成果を各製糖会社に提供し、各社がそれを運営に反映させた結果であった。浜口の研究業績は台湾の製糖業にとって指導的な地位にあり、全島40余カ所の製糖工場から研究補助費が与えられていた。気候や土壌の状況から見れば、台湾の砂糖黍は世界の第二水準に止まり、ジャワ、フィリピン、キューバ等の国とは比べものにならない。世界市場の糖価の影響を避けるため、台湾の製糖業はすべて集約方式の下で行われ、同時に搾糖率を91%にまで上げ、ジャワなどの87%を超えることに成功した。この3-4%の差は台湾独自の製糖技術によって成し得たものであり、まさに製糖化学講座が自負する研究成果でもあった。講座には他にも優れた業績があり、例えば耕地で白糖を製造する際の浄化に関する研究(sulphurous acid method)、各種製糖方法の改良、公定亜硫酸法の提唱、製糖工場における現地指導、脱色炭の製造及びその理論的研究、製糖副産物の成分及びその利用法の研究などが挙げられ、刊行物『製糖化学彙報』を第1巻から10巻まで発行した⁵⁵。

⁵⁴ 「熱と光に恵まるゝ熱帯農業の将来 台大理農学部の使命」『台湾日日新報』1928年5月1日、第2面。

⁵⁵ 浜口栄次郎「製糖」、南方農業協会編『台湾農業関係文献目録』東京：アジア経済出版社、1969年、附録12-13頁。

(2) 農学・熱帯農学

1928年3月、初期の理農学部には農学・熱帯農学第一、第二講座が設けられていたが、1930年に第三、第四講座が増設され、1944年には太平洋戦争の需要によって第五講座が増設された。そのうち、農学・熱帯農学第一講座（農業経済学講座）は奥田彥を講座教授としていた。奥田は1917年に東北帝国大学農科大学農学科を卒業し、1919年北海道帝大助教授に就任、1922年に農業経済学を研究するため、イギリス、アメリカ、ドイツへ2年間留学し、日本における農村土地制度研究の権威となった。1927年に台北高等農林学校教授に任命され、再度ドイツ、フランス、イギリス、アメリカを訪れた。帰国後台北帝大付属農林専門部教授となり、その後理農学部付属農場長に昇進。台湾の農村経済を主な研究対象とし、台湾原住民の土地制度や耕作様式及び農業経済方面にも研究を進め、「台湾蕃人の農業経営に関する私見」「紅頭嶼ヤミ族の農業」「台湾蕃人の焼畑農業」「台湾に於ける土地割替制度の一事例」等の論文⁵⁶を発表、また『台湾農業の特質』『台湾の農業』『紅頭嶼ヤミ族の社会組織』等の著書を出版した。この講座の研究科目には、台湾農業経営における地帯分布の研究、台湾の農業法および農民宗教に関する研究、原住民の農業調査、南洋及び瓊崖等における農業調査などがあった。活発に研究を行い、研究報告を百余回も発表した。

第二講座は田中張三郎が担当し、内容は主に園芸学であった。田中は東京帝大農科大学の卒業で、1927年5月に来台し、台北高等農林学校教授となってまもなく、総督府「在外研究員」の身分でアメリカ、イギリス、ドイツにて研究を深め、その間に台北帝大付属農林専門学校教授に任ぜられた。田中教授は柑橘類研究の専門家で、特にその柑橘類の分類は独創的であり、新小種主義における柑橘亜科の新たな分類システムを完成し、広く学界より賞賛を得ていた。田中は産業植物の鑑別と分類、遺伝学に関わる育種研究、菌類植物の病理学、農業地理や天然資源、熱帯農学と熱帯園芸学、栽培、農園管理、産業政策及び経済貿易等広い研究範囲を涉猟し、その著作は千にも達する⁵⁷。重要な著作には、『日本柑橘種類学』『日本柑橘図譜』『遺伝学』『果樹』『柑橘・研究』『南方植産資源論』『温州蜜柑譜』『果樹分類学』等がある。1932年、田中は『温州蜜柑譜』で東京帝大農学博士号を取得、1933年に日本農学会賞を受賞するなど、柑橘研究における世界最高の権威であった。

園芸学教室は園芸学、造園学及び有用植物学研究を中心に多くの研究報告を産み出し、更に『熱帯園芸』『柑橘研究』の2種の定期刊行物を有していた。月刊『熱帯園芸』は研究成果の発表と海外研究概況の紹介を主とする、当時世界で唯一の熱帯園芸学術雑誌であり、日本の学界では最高レベルの総合園芸誌との評価を得ていた。『柑橘研究』は当時全世界で5、6種あった柑橘専門誌の中で最も内容が充実しており、柑橘産業にとって不可欠な文献であった。また、園芸学教室は広さ1.6甲ある農園を所有し、そこには温室と日照室が備えられ、熱帯性・温帯性園芸植物の栽培、養成と育種、また学生の実験及び実地指導の場として使用されていた。果樹・野菜経営実験のための標本室は広さ1甲で

⁵⁶ 台湾新民報社編『台湾人名辞典』1989年、43-44頁。

⁵⁷ 「台北帝国大学農学部園芸学教室業績目録」『熱帯園芸』第11巻第1-4号、1943年12月、218-227頁。
財団法人南方農業協会編『台湾農業関係文献目録』1969年3月、90-106頁。

あり、熱帯・温帯果樹、柑橘、香料植物、薬用植物、有用植物、観賞植物等各数十種類が栽培されていた⁵⁸。

第三講座は磯永吉が担当し、作物学を主な研究内容としていた。磯は1911年東北帝大農科大学農学科を卒業し、翌年3月来台後、台湾総督府農事試験所技手、技師、中央研究所技師等を経て、1928年に総督府「在外研究員」として欧米へ留学、農学博士号を取得した。彼は台湾の稲作における育種改良の先駆者とされた人物である。この講座は稲の研究を中心とし、研究成果には、台湾在来種と日本品種の品種特徴、期作数、生育日数、葉と茎の形、芒（ほさき）、穂、玄米に関する栽培法研究報告26冊、繊維作物（例えば Ambari-hemp, Cassava, Derris）等数種の新種作物の栽培法に関する研究報告15編、台湾で麦を耕す方法に関する研究報告10編、及び作物生理学系研究報告11冊等があり、二期作稲に関する問題と、台湾と海南島の農業に関する比較研究については、すべて具体的な結果を得ている。講座所有の器具には、穀粒計、成長根横圧及び縦圧試験器、繊維強度試験機等があり、図書・雑誌の所蔵もかなりの水準だった⁵⁹。1932年、磯永吉は「台湾稲の育種学的研究」で日本学士院農学賞を受賞、これは台湾在住者として最初の実賞となった。

第四講座は育種学講座であり、市島吉太郎が講座教授を担当していた。市島は稲と砂糖黍の遺伝と育種に関する研究を行っており、1934年に病没後、1935年からは安田貞雄が後任にあたった。この講座は生殖生理学と細胞遺伝学の研究を重んじ、完成した報告には育種学研究30編、細胞学研究9編、生殖生理学研究34編、煙草に関する研究13編等がある。作物育種とは遺伝上の突然変異によって作物の特徴を改善することを指し、その方法には新品種を導入する他に、主に分離法、雑交育種法と突然変異法の三種の人工育種法がある。日本占領初期は主に前二種の方法を採用していたが、台北帝大育種学教室はX光線を照射し或いはコルヒチン（colchicine）等の化学薬品で種のホルモンを変化させ、突然変異を誘発させることによって実用性の高い優良品種を作り上げた。台湾の重要農作物である稲、砂糖黍、サツマイモ、煙草等はすべて育種改良されている。改良を通して、産量の大幅な上昇と品種の改良が達成された⁶⁰。

1944年、日本帝国の南方作戦及び統治上の需要を考慮し、特に大東亜共栄圏において唯一不足している繊維資源について、紡績・包装資源である綿花、ジュート、ラミー等の生産に供するため、台北帝大は工芸作物学を主な研究内容とする農学・熱帯農学第五講座を増設し、渋谷常紀を講座教授に任命した。この講座は、綿花、ジュート、ラミーその他の繊維資源の生産に関する問題、およびこれらの原料を製造加工する紡績業、包装業の自給自足を目指して研究を行った。また、ケナフ（アンバリ麻：Ambari-hemp）、タピオカ（Cassava）、デリス（Derris）等の作物栽培法についても積極的に研究を進めた。

⁵⁸ 「会員名簿」『熱帯園芸』第1巻第12号、1931年12月、1-22頁。「台湾園芸協会会則」『熱帯園芸』第5巻第2号、1935年2月。

⁵⁹ 国立台湾大学編『国立台湾大学概況』1947年、55頁。

⁶⁰ 加茂巖「育種」、南方農業協会編『台湾農業関係文献目録』附録、東京：アジア経済出版会、1969年、7-8頁。

4 医学部の台湾学研究

1936年、台北帝大は台湾の気候と風土が日本と異なり、開発の際に医療衛生に関する問題が多発することを予想し、医学部を創設した。東京帝大教授三田定則を部長とし、日本一の医学部とすることを目標としていた。同時期の日本南進政策の推進と教授陣の強化によって、台北帝大は徐々に熱帯医学研究の殿堂となり、医学部創立と同時に、総督府中央研究所衛生部を付属熱帯医学研究所と改めた。研究所には熱帯病学科、熱帯衛生学科、細菌血清学科、厚生科を設け、台湾の風土、気候及び熱帯疫病の研究を進めた。研究所は1945年までに計500余編の論文を発表し、豊富な研究業績によって関連疫病的予防と治療について有効な改善方策を提供した。

(1) マラリア研究

日本統治期において、最も植民地主義的特徴が著しい熱帯医学研究はマラリアであり、研究成果も最も多い。マラリアは亜熱帯風土病として、台湾島内各地において年中発生する地方性疫病であり、台湾が「瘴癘之地」と呼ばれるようになったのもこの疫病が原因である。1899年、総督府は「台湾地方病と伝染病調査委員会」を設立し、専門的に台湾の各種風土病・伝染病を研究調査した。研究対象はマラリア、ペスト、赤痢、毒蛇、チフス、デング熱、アヘン中毒、肺吸虫症、流行性脳脊髄膜炎、甲状腺腫等であり、その中でもマラリア研究に関する論文数が最も多く、総数の4分の1に達している。マラリア研究における最大の突破口はマラリア原虫と媒介となるハマダラ蚊の発見であり、研究の積み重ねからは、当時の日本人が緊急にこの疫病的の解明を進めようとしていたことが窺える⁶¹。

1936年、台北帝大が医学部を設立した後、マラリア研究は自ずと中枢研究の一つとなった。例えば、小田俊郎教授は1940年度日本内科学会総会で、委託された1年間のマラリア臨床研究の報告を行った。小田は、台北ではすでにマラリアの病例は見られなくなったが、山地部落に蔓延傾向が見られると指摘した。この報告によって、南進政策推進のためにはマラリアを撲滅する有効な対策の実施が不可欠とされた。小田はその著作『臨床マラリア学』で国内外におけるマラリア関係の文献を詳細に紹介し、臨床症状について系統的に述べている。これは台湾学生がマラリアを知るための必読書となった。また、塩野義製薬の協力の下、森下薫が基礎医学、小田俊郎が臨床医学の研究を進め、当時としては貴重なマラリア映画の制作も行った。

1942年6月、小田俊郎は医学部同僚の横川定、下條久馬一と共に熱帯医学会を設立し、雑誌『熱帯医学』を創刊した。この雑誌は1944年2月までに計5号を発行し、各自の研究成果を発表した他、海外における熱帯医学研究の最新成果も紹介した。1943年3月、台北帝大付属熱帯医学研究所は不定期刊行の『熱帯医学研究』を発行、所員の研究業績を発表する場となり、1944年3月までに計4号を発行した。事実上、熱帯医学会の成立は、1937年の日中戦争勃発により、マラリア等の熱帯疫病的をさらに重視するように

⁶¹ 範燕秋「台湾医学史—從晚清到戦後初期台湾の近代医学」、陳威遠等編『台湾史蹟研究会九十一年会友年会実録』台北：台北市文献委員会、2002年、72-75頁。

なったことに起因する。まず有志で熱帯病集談会を作り、それが1942年に熱帯医学会に改称された⁶²。小田俊郎は東京帝大の卒業で、1930年代の著名な医学者であり、同時に熱帯病医学の第一人者であった。1937、38年には、杜聡明らと満洲で設立した日本学術協会総会、及びベトナムのハノイで開催された第10回極東熱帯医学会に出席した。その後も何度も広東・北京及び戦後の香港へ出張し、1938年には台北帝大医学部付属病院院長に就任、1942年に医学部部長に当選した。小田の台湾医学界における影響力は極めて大きかった⁶³。

(2)伝染病研究

マラリア研究以外にも、台北帝大医学部は多数の学術研究業績を有しており、特に熱帯病、甲状腺腫、結核、小児夏季熱、妊娠中毒症に関する研究は世界レベルに達するものであった⁶⁴。内科講座教授の桂重鴻はヒノキチオール (Hinokitiol) を腫瘍、肺壞疽、結核性痔瘻、熱帯潰瘍等の治療に使用し、効果を得た。小児科講座教授の酒井潔は小児の夏季熱を中心に研究し、高温多湿の環境がこの症状の原因であることを発見した。彼は適切な診断と治療を冷房とともに与えると症状の改善が見られるという研究結果を出している。外科学講座教授の河石九二夫は地方性甲状腺腫の研究の他に、将来に備えるための輸血治療研究として、郭宗波と共に豚、馬等諸動物の血液で人間の血液を代用する実験も行っていた。高橋信吉は熱帯性皮膚病を研究し、渦状皮癬の病原菌は単一種類の糸状菌であること、点状角質融解症の病因は放線菌であること等を発見した⁶⁵。

結核に関する研究成果も多く、特に第一講座教授小田俊郎の研究が最も優れていた。小田はかつて台北市高等専門学校・中等学校において、台湾人学生と日本人学生の比較観察を行ったことがあり、台湾人学生における結核菌素の陽性反応率が日本人学生より高いことを発見した。胸部X光線図で、肺の病変が起きていた日本人学生42名、台湾人学生12名中、2年から4年の追跡観察後、日本人学生14名が発病（そのうち6名が死亡、8名が病気を原因に休退学）したのに対し、台湾人学生12名は全員健康であったという結果を得ていた。第二講座教授の桂重鴻は日本結核病学の権威であった。当時の結核病死亡率が比較的高かった台北と低かった新竹における観察調査で彼が発見したのは、死亡率が比較的低い地域の住民の結核菌素陽性反応率は予想より高く、そして多くは青年期に感染し、胸部X光線図の結果も明らかに予想より高いという事実であり、結核患者及び結核死亡者が高齢者に多いという認識を覆した⁶⁶。また、桂は1938年に野副鉄男とヒノキチオールからのRhodinsäure (左旋性洛丁酸) の純粋分離に成功した。オガルカヤより抽出した成分 (雄刈萱酸) で重症肺結核を治療した結果、痰の中の結核桿菌が減少さらに消失していること、赤血球の沈降速度が徐々に下がりながら正常に回復し、症状

⁶² 丸山芳登編『日本領時代に遺した台湾の医事衛生業績』横浜：編者、1957年、110-111頁。

⁶³ 葉炳輝・許成章『南天の十字星—杜聡明博士伝』高雄：精華印書館、1960年、133頁。小田滋「堀内・小田家三代百年の台湾史—台湾の医事、衛生を軸とした身辺雑記〈四〉」『台湾協会報』第553号、1990年10月15日、第2面。

⁶⁴ 「台湾大学医学院第一附属医院変遷概況」『民報』1946年11月18日、第3面。

⁶⁵ 杜聡明「第四十四回総会開会致辞」『台湾医学会雑誌』第50巻第11号、1951年11月28日、5-6頁。

⁶⁶ 丸山芳登編『日本領時代に遺した台湾の医事衛生業績』、97-99頁。

が明らかに改善されるという結果を得た。類似実験として、Geranic acid（香葉酸）とその水素添加物とラノリン脂肪酸を反応させる実験においても良好な結果を得た⁶⁷。

(3)薬理学研究

薬理学研究は、台湾籍教授の杜聡明が主に担当していた。杜聡明は1921年、台湾総督府医学専門学校の助教および中央研究所衛生部技師を兼任していた時期よりアヘン・蛇毒及び漢方薬学等台湾本土の特色ある研究を行っており、その成果の中には関係研究の先駆といえるものもあった。杜の研究のうち、アヘン研究は基礎理論及び臨床・応用両面で多くの優れた成果を出しており、125編もの論文を発表している。彼の最大の成果は1931年に発表した微量モルヒネの定量・定性尿液検査であり、これによって台湾のアヘン吸引人口を日領初期の20万人より1945年の56,000人にまで減少させ、時代の与えた任務を完うした⁶⁸。蛇毒に関する成果は二つあり、一つは台湾の毒蛇被害調査で、もう一つは台湾産毒蛇の毒物学的研究である。1939年、杜聡明は第13回日本薬理学会会長に選出され、「台湾ニ於ケルドクヘビ咬傷被害ニ関スル統計的観察」「台湾産毒蛇ノ毒物学的研究」の題目で講演を行い、台湾の蛇毒に関する具体的な研究内容を紹介して来場者に深い印象を残した⁶⁹。1941年、140頁に及ぶ論文「台湾毒蛇傷人之統計報告」を発表、1944年には『薬理学概要』を出版するなど、台湾科学史上に輝かしい業績を残している。

もう一つ、言及すべきは、杜聡明が一貫して「楽学至上、研究第一」を座右の銘とし、学生の「勤僅治学」を支援したことである。彼の薬理学教室の学生の多くが医学博士号を取得している。例えば1933年に薬理学教室に入学した李騰嶽は、7年の間に計15編の論文を発表した。彼は台湾産蛇毒の炭水化物代謝機能に関する実験研究を専門とし、1940年に京都帝大で医学博士号を取った。李鎮源、彭明聡も蛇毒研究の成果により1946年に台北帝大で医学博士となった。1934年から1945年までに、蛇毒研究をテーマに博士の学位を取得した薬理学教室の学生は陳景崧、賴其録、王人喆、浮野竹市、李騰嶽、高橋敬文、藤井善男、沈孝猷、陳石鍊、李達莊、松田進勇、李鎮源、許燦煌、彭明聡、傅雄飛、劉聡慧の16名で⁷⁰、同教室からは台湾医学研究の先鋒と目される人物が輩出した。

⁶⁷ 「本省特有肺病薬擬託専売局代製」『人民導報』1946年6月28日、第2面。

⁶⁸ 劉士永「杜聡明対台湾薬物戒隠治療の貢献」『二十世紀台湾歴史与人物：第六回中華民國国史專題論文集』台北：国史館、2002年、400-405頁。

⁶⁹ 「杜教授及薬理学教室員業績目録」、李鎮源編『杜聡明教授在職二十五周年祝賀紀念集』台北：牧樟会、1947年、14-48頁。

⁷⁰ 李鎮源「台湾蛇毒研究の歴史—特別關於神經毒素の研究史」、李鎮源編『台大医学院薬理学科史』台北：国立台湾大学医学院薬理学研究所、2000年、136頁。

結 論

台北帝大は創立以来、台湾学を中心に研究を行い、それが後に南方研究へと拡大、発展した。学術上の発展の特徴は、以下の3点にまとめられる。

学術における分担

近代日本の対外拡張は、「北進」と「南進」の二方向に分けられる。その内、「北進」は朝鮮、中国の満・蒙を主な拡張路線とし、「南進」は台湾・華南・南洋を主な拡張路線としていた⁷¹。その結果として、1895年、1910年に台湾と朝鮮を植民地として獲得し、1928年、1926年に台北帝大と京城帝大を創立した。

台北帝大と京城帝大は植民地大学であり、そこには植民地統治者側の「因地制宜（その地の環境に合う方法を選ぶ）」の観点が窺える。台北帝大は帝国の南方辺境に位置する植民地大学として、南進政策の推進に歩調を合わせるため、各学科では主に台湾を対象とする研究が行われ、南洋及び熱帯に関する諸研究の面でも、他大学には見られない特徴を持っていた。1926年に創立された京城帝大も、北進の政策に合わせ、研究の重点を朝鮮及び中国の満・蒙地域に据えた⁷²。各大学とも母国の植民地政策に対する協力者を演じ、そして研究成果は総督府や日本政府の政策の参考として使われた。

台湾学研究から南方研究へ

地理的位置から見ると、台湾学研究にしても南方研究にしても、日本帝国にとっては「南方」についての研究である。しかし研究主体とその豊富な内容から見れば、南方研究の実質は台湾研究を一步進展させたものであり、台湾学研究の経験が南へ移動したことによって成立したものである。特に南洋史学、熱帯農学、熱帯医学研究については、日本の南進範囲の拡大によって、広く深く進んでいったのである。したがって、台湾学研究がなければ南方研究は成り立たなかった。

1937年以前、台北帝国大学の各学科は台湾を中心とした研究を進めていたが、1937年以降は、南進政策に合わせるため、様々な資源調査を行うための学術的な総動員が始まった。1938年7月、台北帝大は南支派遣軍への協力のために厦門大学を受け入れ、翌年2月、広州での開発事業の再開を機に、広東地域を中心とした華南調査を行った。1939年2月、日本軍が海南島に進駐した際も、台北帝大は2回にわたる大規模な学術調査活動を企画し、厩大な調査業績を残した⁷³。1941年には外務省への協力で南方調査計画を推進し、1942年の海軍軍政地区セレベス島での学術調査計画も、台北帝大が軍事的南進政策に歩調を合わせたものであった。

⁷¹ 矢野暢『日本の南洋史観』東京：中央公論社、1979年、12-13頁。

⁷² 朴光賢「京城帝国大学と「朝鮮学」」名古屋大学大学院人間情報学研究科博士論文、2002年。

⁷³ 『台北帝国大学第一回海南島学術調査報告』台北：台湾総督府外事部、1942年。『台北帝国大学第二回海南島学術調査報告』台北：台湾総督府外事部、1944年、1-2頁。

継承と革新

1945年8月の日本敗戦後、中華民国政府が台湾を接收し、その「日本化を排除し、中国化を求める」政策の下で、台湾を中心とする研究は徐々に衰退し、中国関係を主とした研究へと転換していった。これについては人文学科が最も際立った傾向を示し、例えば台北帝大文政学部史学科の土俗・人種学講座は、戦後、台湾大学文学院史学科民族学研究室に改称され、1949年には独自の考古人類学系を創設した。教師陣も大陸から遷台した中央研究院歴史語言研究所の研究員が主となり、研究課題も河南安陽の殷墟に関する考古学や、甲骨文研究などに移行、戦前の台湾学研究から一転した。しかし医、農、理学院の研究で医学、自然科学及び応用科学の部類に入る課題はこのような状況の変化に左右されず、変動が少なかった上に更なる創新も見られた。例えば、薬理学研究の蛇毒研究は社聡明の弟子李鎮源に継承され、引き続き国際的に活躍することとなった。

(原文：中国語、日本語訳：王莞晗)